ICHINOMIYA CITY MEMORIAL ART MUSEUM OF SETSUKO MIGISHI

コレクション展（常設展）

知られざる人物画－節子の描いた美しい女性たち

会期：2024年 9 月 7日㊏～ 11 月 24 日㊐

展示目録

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横（cm）	号	技法・材質
1	自画像	1925（大正14）	20歳	30.5× 22.0	3F	油彩・キャンバス
2	月夜の縞馬	1936（昭和11）	31歳	38.2× 63.2	変12P	油彩・板に貼った厚紙
3	もや	1937（昭和12）	32歳	60.0× 72.5	20F	油彩・キャンバス
4	馬	1930年代		33.3× 24.3	4F	油彩・キャンバス
5	群がる馬	1938（昭和13）	33歳	162.0×130.0	100F	油彩・キャンバス
6	室内	1942（昭和17）	37歳	91.0× 73.0	30F	油彩・キャンバス
7	室内	1930年代後半～40年代前半		60.0× 90.9	30P	油彩・キャンバス
8	室内Ⅱ	1940年代前半		80.5× 99.8	40F	油彩・キャンバス
9	二つの像	1959（昭和34）	54歳	80.3×130.3	60M	油彩・キャンバス
10	火の山にて飛ぶ鳥（軽井沢山荘にて）	1960（昭和35）	55歳	72.7× 60.6	30F	油彩・キャンバス
11	朝がきた（ヴェネチア）	1971（昭和46）	66歳	90.9× 72.7	30F	油彩・キャンバス
12	霧	1973（昭和48）	68歳	80.3× 65.1	25F	油彩・キャンバス
13	小さな村	1988（昭和63）	83歳	73.0× 60.0	20F	油彩・キャンバス
14	アルカディアの赤い屋根（ガヂスにて）	1988（昭和63）	83歳	60.0× 73.0	20F	油彩・キャンバス
15	花（ヴェロンにて）	1988（昭和63）	83歳	55.0× 46.0	10F	油彩・キャンバス
16	花	1989（平成元）	84歳	73.0× 60.0	20F	油彩・キャンバス
17	作品Ⅱ	1991（平成３）	86歳	116.7× 90.9	50F	油彩・キャンバス
18	作品Ⅲ	1991（平成３）	86歳	110.0×110.0	60S	油彩・キャンバス
19	谷桃子氏肖像画（習作）	1956（昭和31）	51歳	66.0× 60.5		水彩・紙
20	貝谷八百子氏肖像画	1957（昭和32）	52歳	45.5× 38.0	8F	油彩・キャンバス
21	浜村美智子氏肖像画	1958（昭和33）	53歳	45.5× 38.0	8F	油彩・キャンバス
22	小林和作肖像（尾道にて）	1950年代（昭和20～30頃）		39.5× 36.5		鉛筆・紙
23	「女人短歌」表紙絵原画　10～ 12号	1951～52（昭和26～27）		33.6× 27.3		ペン、油彩・紙
24	「女人短歌」表紙絵原画　58～ 61号	1963～64（昭和38～39）		30.3× 20.7		鉛筆・紙
25	「女人短歌」表紙絵原画 127～134号	1981～82（昭和56～57）		37.5× 28.0		油彩・紙
26	岡田三郎助「三岸節子肖像」	1923（大正12）		45.8× 33.3		岩絵具・キャンバス
27	小川マリ「婦人像」	1934（昭和９）		116.7× 90.9		油彩・キャンバス

表紙絵を手がけた雑誌
「週刊朝日」表紙絵、モデル：谷桃子（1956年1月8日号）
「週刊朝日」表紙絵、モデル：貝谷八百子（1957年3月17日号）
「週刊朝日」表紙絵、モデル：浜村美智子（1958年3月16日号）
「女人短歌」表紙絵 129号

装丁書籍
『チャタレイ夫人の戀人』D・H・ロレンス著　伊藤整訳、1935年(初版)、健文社
『左川ちか詩集』1936年、昭森社　『コドモノクニ』15巻11号、1936年9月、婦人画報社
『オリヴァー・ツウイスト』(世界大衆文学名作選集　第17巻)ディッケンス著、馬場孤蝶訳、1939年、改造社
『子供之友』26巻10号、1939年10月、婦人之友社　『フィリッピン』中屋健弐、1942年、興亜書房
『愛の畫廊』富澤有為男、1946年、湊書房　『三つの恋』大鹿卓、1946年、湊書房　『紫の帯』北條誠、1947年、湊書房

19 寄託作品

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録の№は作品の並びと異なります。

一宮市三岸節子記念美術館　〒494-0007　愛知県一宮市小信中島字郷南3147-1　電話：0586-63-2892　https://s-migishi.com

知られざる人物画
―節子の描いた美しい女性たち

絵を描く対象としては敬遠していた「人物」ですが、装丁画、雑誌の挿絵・表紙画には、数々の美しい女性や動物を描いています。これらの作品を、人物を描いた数少ない油絵とともに紹介し、節子の知られざる人物表現の魅力に迫ります。

自画像

《自画像》1925年 ©MIGISHI

風景、静物画家として知られる節子ですが、展示室入り口の真正面に飾られた《自画像》〔No.1〕は、当館の収蔵品の中でも、特に人気のある作品です。1925(大正14)年の春陽会第3回展に《風景》《山茶花》《机上二果》とともに出品し、女性初の入選となった本作には、艶やかな赤い着物と暗いえんじ色の羽織に身を包んだ画家自身の姿が描かれています。幼さを感じさせるおかっぱの髪型は、当時流行していた「モガ」のスタイルである断髪で、ノンフィクション作家の澤地久枝氏は、「断髪は人間らしさを主張し、生き甲斐のある人生を探して生きてゆくという宣言たり得る『事件』だった。」(*1)と述べています。また、こちらを見据えているかのような眼差しにも、若き画家の強い決意と鋭い感性が感じられます。この頃節子は第一子を身ごもっており、母、妻、画家として生きていくことに対する畏れや不安もあったのでしょう。交錯した思いを、右目と左目を描き分けることで見事に表現しています。これから歩むことになる画家としての険しい道のりを予感させる、記念碑的デビュー作です。

生き物(馬)の絵

《月夜の縞馬》1936年 ©MIGISHI

絵のモチーフについて「対象が生き物だといふことがまだ気がかりです。静物のやうに静かに黙つてゐてくれない。生きた動物は困るのです。」(*2)と述べていた節子ですが、1930年代、「馬」を題材にした作品を何点か制作しています。1935(昭和10)年に伊藤整の翻訳により出版された『チャタレイ夫人の戀人(こいびと)』の表紙絵に月を見上げる2頭の縞馬を描き、さらに《月夜の縞馬》と題した油絵〔No.2〕を第1回七彩会展に出品しました。装丁画、油絵に描かれた縞馬は、黒い紐に絡まれ、輪郭線のみで形作られた虚ろな人たちに繋がれています。これらの縞馬の姿には、世間のしがらみに苦しむ女性の姿、女性洋画家として必死に生きている節子自身の状況が映し出されているように思われます。同様の図柄は、1936(昭和11)年に発行された『左川ちか詩集』の表紙絵にも使われ、昭和初期のモダニズムを駆け抜けた夭折の詩人、左川ちかの世界観と結びつくものがあります。

一方、大作の《群がる馬》〔No.5〕は、夫の好太郎の故郷である北海道を訪れた際に見た実際の馬をモチーフにしており、様々な色とポーズの馬が軽いタッチで流れるように表現されています。

室内画の中の女性像

《室内Ⅱ》1940年前半 ©MIGISHI

1930年代後半から1940年代前半、節子はフランスの画家、アンリ・マティスやピエール・ボナールを思わせる色彩豊かで装飾的な室内画の制作に取り組みました。室内画の多くは、果物や花瓶、テーブル、椅子などの静物を描いたものですが、《室内Ⅱ》〔No.8〕のように、部屋の中でくつろぐ女性の姿を描いたものもあり、節子の人物表現を知る貴重な作品となっています。周りの空間に溶け込んだ本作の女性は、温かい色使いで軽やかに描かれ、親密な情景の重要な構成要素となっています。

肖像画・人物画

《貝谷八百子氏肖像画》1957年 ©MIGISHI

右の作品は、『週刊朝日』1957(昭和32)年3月17日号の表紙絵の原画〔No.20〕で、戦後を代表するバレリーナ・貝谷八百子氏がモデルとなっています。節子が個人の肖像画を描くことは珍しいことですが、『週刊朝日』が1956(昭和31)年～58(昭和33)年に行われた“表紙コンクール「日本の女性」”という企画に参加し、同じくバレリーナの谷桃子氏、歌手でモデルの浜村美智子氏の3人の肖像画を描きました。当時の心境を、「日本の代表女性を描くか、描かないとすればモデルに回れという、そのいずれかと問いつめられれば、みずから絵筆持つ身、人物をもっとも不得手としながら、ついにフテイにも描く側になりました。」(*3)と、ユーモアを交えて語っています。赤と黄色のシャープなラインの洋服に身を包んだ貝谷氏の凛とした佇まいが印象的な作品で、他の肖像画〔No.19〕、〔No.21〕と合わせ、女性を描いた稀少な人物画となっています。

(*1)澤地久枝『好太郎と節子　宿縁のふたり』日本放送出版協会、2005年、P39
(*2)三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、P16-17
(*3)『週刊朝日』1956年1月8日号、P85

ICHINOMIYA CITY MEMORIAL ART MUSEUM OF SETSUKO MIGISHI